今週の推し

【評者】歌手・沢知恵

時空超える詩

月」によって、衝撃とともに全人格像があらわになりました。近年はその暮らしぶりや料理に関する本も出版されています。本書では茨木のり子の生き方から立ち現れる詩の世界を深く味わうことができると同時に、韓国という視点から照射することによって、その根幹にあったものが書かれた詩〈を求めて独自のスタイルを築いた軌跡が系統だって書かれていますが、それに呼応するように、韓国の詩壇の流れも時代背景とともにわかりやすくまとめられています。

茨木のり子が翻訳したのは、韓国での評価にかかわらず、〈自分の気に入った詩だけ〉。その翻訳をつぶさに分析した第4部は圧巻です。大胆な省略や日常の言葉への置き換えをした例は興味深く、〈思想性〉と〈語感〉を詩に昇華させる姿勢を徹底した茨木のり子の美学を技法として確認できる貴重な考察です。

いま韓国でも茨木のり子の詩が共感を得ているとか。〈対話〉によって〈あの隙間／いましっかりと自分の言葉で埋めてみたい〉（「りゅうりぇんれんの物語」より）と希求しつづけた詩人の思いは、時空を超えていくと再認識しました。

《筑摩書房・2420円》

読書 BOOKS

「コロナとバカ」ビートたけし著

新型コロナウイルスの感染が拡大する中で、タレントで映画監督の著者が「バカ」と思った人々や出来事に対して、歯に衣着せぬ物言いで持論を展開する。

まずは政治家。小池百合子東京都知事、吉村洋文大阪府知事ら政治家の政策や姿勢を次々に糾弾する。流行にすり寄るような発言や行動を繰り返す菅義偉首相や安倍晋三前首相を取り上げ「ニッポンの政治家はスケールが小さくなった」と嘆く。批判の矛先は、ワイドショーや週刊誌に登場した芸能人やコメンテーター、市井の人々にも及ぶ。不倫問題、薬物事件、自粛警察―。

鋭い発言ばかりだが、あまり嫌気が差さないのは、志村けんさんを悼み、芸人やエンターテインメント界の窮状を憂う、自身の日常に照らした上でのものだからか。

語り下ろしと週刊誌「週刊ポスト」での連載をまとめた一冊。出版社によると、発売から1週間で重版が決まり、発行部数は5万5千に達した。著者の主なファン層である50～60歳代の男性から、購買者層が広がっているとの手応えがあるという。

《小学館新書・880円》

志村さん悼み業界憂う

平積みの1冊

webun でもう2冊

①柳広司著「アンブレイカブル」／明かされる不愉快な実態／評者はミステリー書評家・村上貴史

②瀬戸正人著「深瀬昌久伝」／生身の声と生きざま伝える／評者は東京都写真美術館学芸員・関次和子

スマートフォンから二次元バーコードでサイトにアクセスできます

主人公の七代目は北条氏康から氏政、氏直の三代に仕えた、板部岡江雪なのだ。短編はあるが、長編で主役になった。

東播磨の大名・別所家は、織田家の中国攻めで、毛利方に付いた。

北条氏康から氏政、氏直の三代に仕えた、板部岡江雪なのだ。短編はあるが、長編で主役になった。一気読みの面白さである。（細谷正充・文芸評論家）

不寛容論　アメリカが生んだ「共存」の哲学

森本あんり著

他人受け入れ尊重する

先の就任演説でアメリカのバイデン大統領は、分断に対する寛容の精神を説いた。しからば、寛容はどこからやって来るのか―。一般的に寛容とは他者に理解を示すこととされる。否、それは違う、と神学を専門にする著者はいう。寛容とは、まず己の信仰があって、それにそぐわない者を受け入れることなのだ、と。

本書は、アメリカに入植したピューリタン、中でも17世紀のロジャー・ウィリアムズという知られざる人物を軸とした、寛容と不寛容、さらにアメリカ建国前の宗教と政治のせめぎ合いについてのスリリングな物語だ。今日では原理主義者と呼ばれたかもしれない、率直かつ熱心な信仰を持つ彼は、英国王と教会に盾突いたために植民地を追放され、新たな定住地を切り拓き、信仰と寛容についての言説を相手かまわず繰り広げていく。

彼の思想は、社会契約論や政教分離を先取りしていたが、それも伝統的な制度や文化が存在しない土地で宗教的実践に取り組む中から生まれた。豊富な逸話は紹介し切れないが、例えば彼は先住民族を対等に扱い、土地を契約で手に入れる。それも、先住民たちと暮らす中で、彼らもまた神の前では西欧人と変わらない「罪人」であると認めたからだった。

かくして、何かを徹底的に信じることができる人でなければ、他者に寛容になることはできない、という結論が導かれることになる。

寛容は、不寛容に直面して初めて試される。その時、確固とした信念や価値―すなわち信仰―がなければ、そもそも他人を受け入れたり、尊重したりするという行為もまた可能にならないという逆説を、本書は信仰がもたらす論理を通じて見事に描き切る。

果たして、カトリック信者でもあるバイデン大統領はウィリアムズの著作を読んだことがあるだろうか。そうでなくとも、世界がなぜかくも不寛容な社会に陥っているのかについても、納得のいく説明を本書はしてくれるのである。

（吉田徹・北海道大教授）

《新潮選書・1760円》

アニメと声優のメディア史

石田美紀著

性の越境が生む文化

かわいらしい装丁にホッコリして表紙を開くと、そこには〝ガラパゴス的〟に進化し、国際的な評価も高い日本の声優の世界が広がっている。なぜ女性声優が少年を演じるのか？　その答えは「目からうろこ」の理由によるものだが、10章にも及ぶ本書の序盤にあっさりと明かされる。ここで答えを書くのは控えるが、著者は日本の声優の歴史をひもときながら読者の好奇心を刺激する。

戦後、GHQによる〝再教育〟の一環として、生放送のラジオドラマがあった。その番組から生まれた「声だけの演技者」がTVの登場によって、21世紀に世界を席巻する日本アニメの「スター声優」へと成長していく。

1960年代初頭、海外作品の吹き替えをめぐり「外国語を話す俳優の演技に声だけ合わす苦痛」を論じた「アテレコ論争」が巻き起こった。その議論への声優永井一郎氏の言葉に思わず膝を打った。「（舞台と声の演技は）ともに『役の人物を肉体化する』点で本質的には変わらない」。僕自身、吹き替えの仕事の多重性に目を回したことがあり、そのときに欲しかった見事な回答だったからだ。後進の俳優にも心強いものになると思う。

ファンとの交流など珠玉のエピソードをちりばめながら、一方で初心者を置いてきぼりにしない。声優の声質やニュアンスが絵に生かされる手法「プレスコ」と、仕上がった絵に声優が従う「アフレコ」についても丁寧に説明。後者が圧倒的に多い日本では、低い自由度の中で演出家と声優が創意工夫を重ねた。それが「他者が決定した視覚的演出に同期する」という、キャラクターの単なる黒子にならないという離れ業を構築した。アニメの台本の読点「、」と3点リーダー「…」のもつ含蓄にもうならされた。

女性が少年を演じた事で生じた「ずれ」の連鎖反応が行き着いた「女性声優の性の越境」。それこそが日本独自のアニメ文化を生んだという面白さ！　人間の〝声〟について再考するチャンスをくれた一冊だった。（小堺一機・タレント）

《青弓社・2200円》

讃岐を贈る オリーブ牛すきしゃぶ用セット 2人前

肉の専門店として50年以上営業する「肉のヒガシハラ」がお薦めする「讃岐を贈る」セットです。香川県産ブランド牛「オリーブ牛」のロースをメインに、讃岐を代表するおいしいお肉3点を詰め合わせました。1～5人前までそろえています。

◆オリーブ牛ロース400g、オリーブ牛ハンバーグ120g×2個、讃岐名物 骨付き鶏 300g×2本

～苺のチョコをかぶった～ さぬき姫のかほり餅

香川県オリジナル品種のイチゴ（3Lサイズ）を使った人気の大福「さぬき姫のかほり餅」がイチゴ入りクーベルチュールチョコをかぶり、バレンタイン用に変身。大粒のイチゴとイチゴを練り込んだ餅、練乳入り白あんのおいしいハーモニーが楽しめます。

◆4個入り（1個75～85g）クール便（冷蔵）で発送

WEB限定　本場さぬきうどんお試しセット

1911（明治44）年の創業以来、研究を重ねたレシピで作った本場のうどんです。この半生うどんは厳選した小麦粉を複数ブレンドし、生うどんに近い食感を残しました。釜揚げ、ざる、鍋物など、どんな食べ方でも本場ならではの「コシ」が味わえます。

◆半生うどん110g（1人前）×4束、うどんつゆ20ml×4袋、ゆで方・レシピ付き「ゆうパケット」で発送